



第131回 インドネシアに行ってきました！

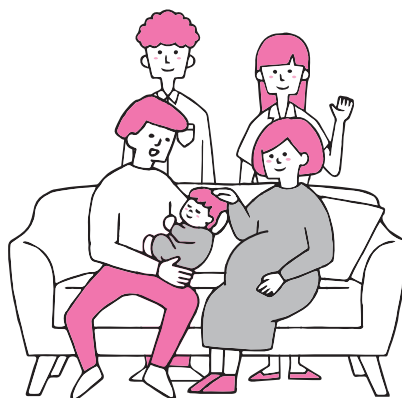
昨年につづき鳥取大学の医学生を連れてインドネシアのプライマリケア研修に行ってきました。日本では大雪が一段落した2月末でしたが、インドネシアの気温は26度です。ジャカルタに降り立つと強い日差しと暑さで、インドネシアに帰ってきたなという感慨をもちます。今回再訪したインドネシアのスマラン市にあるディボネゴロ大学は鳥取大学の協定校で、以前から研究や人材育成の交流が盛んです。インドネシアはもはや発展途上国ではなく、先進国の仲間入りをしつつある国です。国土の面積が広く島も多く、言語も民族も多様で、イスラム教を含む多様な宗教と文化が混在しています。医療はイギリスと同じように家庭医制度をとっており、医師の7割は家庭医となって診療所ブスケスマスで働き医療の最前線を担います。

▼インドネシアの医学生たち

特に印象的だったのはディボネゴロ大学の医学生たちの姿です。学生らと訪れたスマラン市内の妊婦さんのお宅を忘れることができません。医学科・看護科・栄養科の学生が一緒に、自宅を何度も訪問して妊婦の健康課題を探るのです。私もディボネゴロの医学生たちと自宅に伺いました。狭い部屋の中で、妊婦さんに栄養状態や家庭状況を尋ね血圧測定をしている様子が印象に残っています。このような多職種連携教育を通じて学生たちは、妊婦さんの住んでいる環境、家庭や社会状況、不安や価値観、そして医師だけが医療を担っているのではないことを学ぶのです。それは医師としての自覚と責任の重さを実感する経験でもあります。このような教育は鳥取大学でもまだできておらず、先進的な地域医療教育として学ぶべきものがあると感じました。

▼明るいインドネシアの人たち

研修のなかでスマラン市から100km北部にあるジェバラという土地を訪れました。高速道路はまだ整備されておらず、チャーターバスで3時間程度かかります。バスで移動中、インドネシアの先生たちはずっとカラオケに夢中です。親日的な方が多く、日本の演歌や歌謡曲も上手に歌われるのには驚きました。「先生もいっしょに歌ってよ」といわれ、私も頑張って昔懐かしいチューリップの歌を披露しました。とにかく、インドネシアの人たちは気さくで明るく社交的で、もてなしの心にあふれ、一緒にいると本当に元気になります。いつか子供の頃に、たくさんの人が出入りしていた、田舎のにぎやかで温かい雰囲気を感じたのでした。鳥取大学の医学生たちも同じことを感じた様子で、口々に「またインドネシアに帰ってきたい」と語っていました。最近はSNSや人工知能ばかりが注目されますが、人と人とのふれあい、これに勝る魅力はないのではないのでしょうか。まこと心の琴線に触れるインドネシアの旅でした。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)